

武蔵野日曜集会

キリストの神秘

――ヨハネ伝第1章16～34節――

1996年1月28日

小池辰雄

キリストは最大の神秘家 本当の現実は一如 霊的神秘の世界 真相・真言・真行 「わが霊的生命を受けとれ」 十字架の贖いを受けとると聖霊がくる

【ヨハネ1・16～34】

16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

19 さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。……

26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』28 これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。

29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。』30 われかつて「わが後に来たる人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。』33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。34 われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

●キリストは最大の神秘家

今日の主題は『キリストの神秘』という題です。私がいわゆる内村鑑三先生のグループの無教会主義の会員であった頃は、この「神秘」という言葉を非常に嫌った。ところが、



キリストは最大の神秘家です。シュヴァイツァーが

「福音から神秘を除いたら一体何が残るか。福音の大事な性格はその神秘性にある」

と、この神秘のことをはつきり言いました。英語のミステリー、ドイツ語のゲハイムニスです。キリストは最大の神秘家である。正にその通りです。

大体、イエスの生誕そのものが神秘です。マリヤの夫ヨセフとの間にできたのではなくて、聖霊の力でマリヤからキリストが生まれたのですから、正にキリストは神秘的な生まれかたをしていらつしやる。日本では聖徳太子が多少それに類するところの神秘家であった。

福音の世界は本当は神秘ですから、言葉でもって説明なんかできない。大体、解釈とか説明というのは第二義的なことなんで、神秘の世界は直観しなければできない。深い祈りの世界でその世界に入らなければだめなんだ。神に祈るということは、祈りは神秘の世界です。

本当の福音の世界はミステリーで、説明なんかできる世界ではない。キリストとの我々の祈りの交わりです。

私のほらわたの中には万斛の涙がある。この涙は火となって燃え上がります。それが私の福音の証になるわけです。福音の世界はいかなる運命環境にも決して屈せずに戦っていく。我自身に対して、また世に対して戦っていく。

最近、西の方でまことに悲惨な自然現象が起きた。あんな所で地震なんか普段は起きないのに、どうしてこの地震が起きたか。日本は神さまに問われている。おおかた信仰がない。

「敬天愛人」

と西郷南洲が言いましたが、今の日本の民主主義には敬天がない。敬天のない民主主義なんてものはだめなんだ。これは西郷南洲がはつきり言ってくれた。敬天がないところに本当の愛人はない。

福音の世界は正に神に愛されている。そして我々は神を愛さざるをえない。キリストに愛されている。キリストが己の生命を棄てて、贖いをしてくださった。しかも今度は、復活して聖霊の生命をくださった。これはキリストの愛の、離すことのできない十字架と、聖霊の二焦点です。そういう神交の現実を、今のクリスチャン自身がどれだけ受けとっているか。いわゆる信仰ではない。神・キリストとの我々の霊的な交わりが本当の神交です。ただ信じ仰ぐ（信仰）ではない。神・キリストと一つになっている現実です。

人間の運命環境はいろいろに変わりますけれども、そんなことに決してこだわらない、支配されない。本当の根元の現実、神・キリスト・我というこの縦の関係がしっかり立つことです。そうすると、本当の愛が、横の関係が展開していく。縦の関係の敬天がなければ、横の関係の愛人はいけません。



● 本当の現実是一如

本当の現実は一如なんです。一つにならなければ、本当の現実ではない。いかなる運命環境にも絶対に負けない。それはこの神・キリストとの交わりがあるからです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とはパウロの言葉です。パウロさんはそのような現実にいたから、キリストの最大の弟子として福音を伝えた。パウロの書いたローマ書はその意味で素晴らしい書翰です。

とにかく、聖書ほどおもしろい本はないし、聖書ほど力のくる、光のあるところの本はない。聖書がおもしろくなくなったら、おしまいです。教えでも何でもありません。私は「キリスト教」の「教」の字は嫌いなんだ。

「キリスト道」

道なんです。自分で歩く道です。日本人は道の民だからね。「キリスト道」なんだ。教えではない。教えだというと、頭でもって判断することになる。「キリスト教」という言い方はだめなんだ。キリスト道です。

中国の老子もそうです。孔子が老子を見て、老子のケタ違いの現実には孔子は参った。老子というの偉い人だ。これは正に無道の道を、道なき道を唱えた人だ。我々はキリスト道者なんだ。キリスト教者ではない。道を本当に自分の足で歩く。

日本は神さまに今、問われている。それでいろいろな事が起きる。一般的にいつて、日本くらい本当の宗教が今生きていない国は他にあるかないか。いわゆる民主主義はだめだ、民主ではない。神主なんだ。神さまが主になっていなければだめなんだ。今の教育家が、自分たちの魂が本当の神との関係——仏さんでもいいよ、仏教でも——とにかく、絶対的なものとの関係がないものはだめなんだ。そういう意味で、皆さん一人一人が本当の戦いを戦ってください。

本当の伝道というものは言葉ではない。その人自身の存在なんです。存在が道を伝えていく。そのもの自身が活ける道なんです。

そういうことで、皆さん一人一人は神さまに、キリストにそのようにして顧みられていますから、この福音を受けて、身証しなくては。存在そのもので証しすることが本当の伝道なんです。

「我を見よ、わがうちなるキリストが見えないか」

と。何も人に言う必要はないけれども、そういう気持ちの存在が本当の証なんです。証し人というのはそういうことです。聖書のことを人にくだくだ語る必要はない。

「来りて見よ。開きて読め」

ということ。アウグスティヌスが何かで困っているときに、

「トレ・レゲ」(取りて読め)

と子供が歌っているのを聞いて、「ああ」と気がついて聖書を読むようになったという。「ト



レ・レゲ」とは「取って読め」ということです。

●霊的神秘の世界

面白いものだね、道を歩いていても、すれちがいざまに、向こうから来る二人の会話の言葉の端っこがパツと耳に入ることがある。それが何かヒントになることがある。不思議なものだね。

真理はいたるところにこぼれています。活眼、活耳、という言葉がある。活ける眼、活ける耳をもつて歩けるということです。

「語らず言わずその声聞こえざるに、その響きは全地にあまねし」とは詩篇19篇の言葉だ。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬ先の父ぞ恋しき」

と白隠はエライことを言った。闇の夜だから鳥は見えない。しかも「カアカア」と鳴かない。その声を聞くという。姿も見えなければ、声も聞こえない。白隠というのは正に神秘の世界をちゃんともつていた人だ。そういう神秘の世界です。聖書は神秘の本です。意味の本ではない。

「これはどういう意味だ」

なんて、そんなことではない。響きの世界です。こういう驚くべき聖書は神さまの霊が書かせた本です。本当にその神境を、果たしてどれだけのクリスチャンが感じているか。意味ばかり考えている。

シュヴァイツァーさんはさすが偉い。非常に神秘の世界をもっている。アッシジのフランチェスコも素晴らしい人だ。ルターもルターらしき神秘の世界をもっていた。

ルター研究会だとか、ゲーテ研究会だとか、あの研究というやつはだめだ。学者ぶっているいろいろなことをいわゆる研究している。ちょうど死体をバラバラにしているいろいろ観察するのと同じことで、それでは生き物はだめになってしまう。生けるものは生けるものそのものとしてつかまなくてはだめだ。ゲーテという人はそういうようにして真理をつかんだ人です。だから、あの大詩人ゲーテは普通のととは違う。

「分析したらだめだ、直観しろ」

という。いわゆる論理的な頭のひとはかえってだめなんです、直観の力がむしろすごい。理屈が先にたつひとはだめです、情感しなければ。情でもって感じなければだめなんです。

私は生きているうちには知られないでいいですよ、一向、人に知られる必要はない。

「生きているうちに知られるようなのは大したひとではない」

と佐久間象山がいった。その人がいなくなつてから何年かたって、

「ああこういう人がいたか」

と驚く。これはキルケゴールも似たようなことを言った。男の人でも女の人でも同じこと



です。存在そのものが言わず語らずのうちに証している。それは決して空しくない。天の巻物に書かれている。佐久間象山の

「いづくんぞ人に知られる事を要せんや」

という句は私の書斎にもかかっている。吉田松陰の

「万巻の書を読むに非ざるよりは、いづくんぞ千秋の人となるを得んや」

一己の労を軽んずるに非ざるよりは、いづくんぞ兆民の安きを致すを得んや」

という句もある。存在そのものをもって人に与えようとする。

キリストが正にそうです。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という現実を開示してくださった。我々一人一人がキリストと一如になる。これが神秘の世界です。あなた方一人一人がその世界に入る。キリストと一つになる。これは霊的、神秘の世界です。

そういう深い神秘の世界をもたないで、「民主主義」なんて言ったつてだめだよ。大体、主義、イズムというものはある限定をしよう。イズムは限定するからだめなんです、イズムを超えなければ。これはゲーテがそのことを言っている。

「イズムの世界はいくつあつてもだめだ。それを乗り越えろ」

と。さすがは大詩人ゲーテだ。『ファウスト』なんかを読むと、とにかく凄い。超一流のものを読んでいて楽しい。楽しいし、力がきてしょうがない。ありがたくてしょうがない。本当の真理は万国のものですからね、どこの国のものでもない。世界的なんです。世界のもんです。本当に世界的にならなくてはだめなんだ、いわゆるただ日本的では。本当の愛国者というのは超愛国でなければ、本当の愛国者にはなれない。

「キリストの福音をいい加減にして、日本は何処に望みありや」

と言わざるを得ない。困ったもんだ。だから、キリストに捕まった者は生涯を通して、皆さん、正に身証してください。それはありがたくて楽しくてしょうがないから。

●真相・真言・真行

それでは、ヨハネ伝に入りましょう。

16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

ヨハネというのは素晴らしいことを証言しているね、全くこの通りだものな。神の生きた真理がみちみちて溢れそうになっている。それを受けとって恩恵に恩恵を加えられる。「恩恵」は「カリス」という字です。生きた真理を与えること自身が「恩恵」で、キリストは



恵みの主体なんです。だから、

「恩恵に恩恵を加えられる」

というのは、イエス・キリスト自身をいよいよくださっているということです。

「キリストの恵みは何ですか？」

なんてだめだよ、キリスト自身が恵みなんだから。

「律法はモーセによりて与えられた」

と。そうだよ、モーセは律法の世界、

「すべしすべからず」

の世界だから。キリストはすべしすべからずではない。「恩恵」というのは、

「私が本当のものをやるよ」

ということ、イエス・キリスト自身をくださる。それは、みちみちたるところの真理そのものなんです。「真理」という言葉が、「理」の字がどうも観念的で困る。これは真の相、真相です。真の言、真言であり、真の行、真行です。

ヨブ記42章に、

「ヨブここ於てエホバに答えて曰く、²我知る汝は一切の事をなすを得たもう。また如何なる意志^{おぼしめし}にても成すあたわざる無し。³無知をもて道を蔽^{おほ}う者は誰ぞや。斯くわれは自ら了解^{さとろ}ざる事を言い、自ら知らざる測り難き事を述べたり。⁴請う聴きたまえ、我言うところあらん。我なんじに問いまつらん。我に答えたまえ。⁵われ汝の事を耳にて聞きいたりしが、今は目をもて汝を見たてまつる。」(ヨブ42・1～5)

大事なのは5節の

「われ汝の事を耳にて聞きいたりしが、今は目をもて汝を見たてまつる」

という言葉です。

「現実にあなたを見ています」

と、ヨブ記のここところは凄いとところだ。我々はキリストを信じているのではなく、キリストを見ている。しかもキリストは神さまの懷の中にいる。だから、今度は私たちもキリストを内側から見なくては。キリストの中に入って、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

ということですよ。

ローマ書8章9節に、

「⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰若しキリスト汝らに在まざば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在る。¹¹若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給



わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。」(ロマ8・9～11)これは凄いね。

「¹⁶御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。¹⁷もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。」
「世嗣」というのは神の国を継ぐ者です。

これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。」
(ロマ8・16～17)

福音のためには苦難を通つていかなくは。迫害される。人にけなされる。棄てられる。そんなことは一向差し支えない。

「人は棄つれども汝は棄てたまわず」という讃美歌があるでしょ。

ローマ書8章は大変なところです。全文が凄いですよ。福音書の次はローマ書だね、特にローマ書8章は凄い。とにかく、聖書ほど楽しい本はない。

「万巻の書も聖書一卷にはかなわない」

と。ゲーテがそう言っている。人の思いや、人の理屈や、そんなものではないから。いわゆる思想ではない。「聖書の思想」なんていう本がある。あんなのはだめだ。聖書は思想ではない。真理の宣言なんです。告白なんです。なにしろまだ私は戦うべきことがいろいろあるわ。

●「わが霊的生命を受けとれ」

ヨハネ伝にもどります。

¹⁸未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。とある。イエス・キリストは神さまの現象体なんです。

「父(神)を現せなんて言つたつて、私を見て分からないか。我を見し者は父を見しなり」

とキリストは言われたでしょ。

また、ヨハネ伝6章に凄いことが書いてある。

「⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。」

と不思議なことを言っているでしょ。これも非常に神秘的な言葉です。



55 それが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。56 わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。57 活ける父の我をつかわし、私の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。58 天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』(ヨハネ6・52～58)

イエスは天来のパンであり、また天来の水でもある。そういう比喩的な具体的な表現をなさったわけです。それも言葉自身が神秘なんです。言葉のすえにこだわる人はその内容が分からない。みな霊的な血であり霊的な肉であるわけです。霊的な生命です。

「わが霊的生命を受けとらなかつたらだめだ」

ということ。それは十字架のキリストと復活のキリストを冥想すると、この所の内容がのみこめます。それは十字架と聖霊です、霊的な生命がくるからね。それが

「肉をくらい、血を飲む」

ことになる。

まあ、本当にそんな読み方をしているクリスチャンが幾人いるかというんだよね。どうしてもこれはそのうちに詩の形で私は表現しなければだめだ。

モーセは120歳まで生きた。アブラハムはもつと長い。なにしろ、あの昔の人はみな100歳を突破している。なにも長生きのために長生きをするのではなくて、福音のためには100歳を突破せざるを得ない。私はそんな気持ちでいます。福音の戦いのためには100歳も突破してしまう。そうせざるを得ない。ただ長生きをしたつてしょうがない。そんな気持ちでいる。

「小池先生はあんなことを言っただけでも、95、96歳で逝ってしまった」

なんて、そうなるかなんか知りませんよ(笑)。ところがどっこい、ということ。福音の戦いがあると、もの凄い力がくるから、そう簡単に死ぬわけにはいかないんだ。賀川さんはさつさつと戦って、70歳で天界に行ってしまったけれども。

●十字架の贖いを受けとると聖霊がくる

ヨハネ伝1章にもどります。

26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後^{のち}にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』

とてもケタが違うひとだと。

28 これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。

29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。30 われかつて「わが後に來たる人あり、我にまされり、



我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。³¹ 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』³² ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鴿のごとく天より降りて、その上に止れり。

おもしろね。見ていたら、御霊が鳩のように天からくだってその人に止まったという。これは大した現実を見ているね、正に神秘的な現実だ。正にミステリーだ。ミステリーという言葉は奥義とも訳す。

³³ 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。³⁴ われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

聖霊でバプテスマを施す。だから、聖霊でバプテスマを施されない人は、

「キリストを信ずる」

なんて言ったってだめなんだ、御霊のバプテスマを受けなくては。御霊のバプテスマを受けるためには、キリストの十字架をしっかりと受けとらなければだめです。十字架と聖霊は分けてはいかん。十字架の贖いをしっかりと受けとると、今度は聖霊がやってくる。よく

「聖霊、聖霊」

と言う人たちがいるが、十字架をいい加減にしているのはだめだ。十字架と聖霊は離すことができない。贖罪して、それから後で聖霊の生命を我々にくださる。

「祈って待っている、御霊がくだるぞ」

と、ちゃんとキリストは言っているんだ。

